備陽史探訪
第57号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

深安郡神辺町 要害山城跡の測量調査

田口　義之

はじめに

昨年（一九九二）二月十六日、本会城郭研究部会では、古墳研究部会の協力を得て、深安郡神辺町大字徳田に所在する中世山城跡、要害山城跡の測量調査を行ないました。

同城跡は神辺平野の中心からやや東よりに位置する独立山塊〃五ケ手山〃の西側の主峰、標高九五・九メートルの要害山の山頂に存在し、従来より土塁、空堀、城門跡の遺構をよく残した山城跡として各種の文献に招介されて来ました。[注①] また、山頂に存在する石鎚神社の社殿下より古墳時代の円筒埴輪が出土し、古墳を利用した山城としても知られていました。[②]

調査は、平板測量を中心とし、一部に同年入手したトランシットも試みに使用してみました。[③]

調査参加者

田口義之、網本善光（古墳研究部会）、出内博都（以下城郭研究部会）、七森義人、中村勤史、馬屋原亨、佐藤洋一、井村富貴男、藤井忠夫、細美徹爾、岩下千枝子

調査の成果

わずか一日の調査ではありましたが、山頂主要部の測量をほぼ終えることができ、以下報告するように多くの成果を挙げることが出来ました。

城自体は、山頂を南北約四十メートル、東西約三十メートルにわたってダ円形に削平し、周囲を二重の土塁と、その間の空堀によって取りかこんだだけの簡単な構造ですが、細部には、「桝形門」の型式をもつ虎口（城門）跡など、戦国期の山城として極めて興味深い遺構を残していることがわかりました。

（土塁）

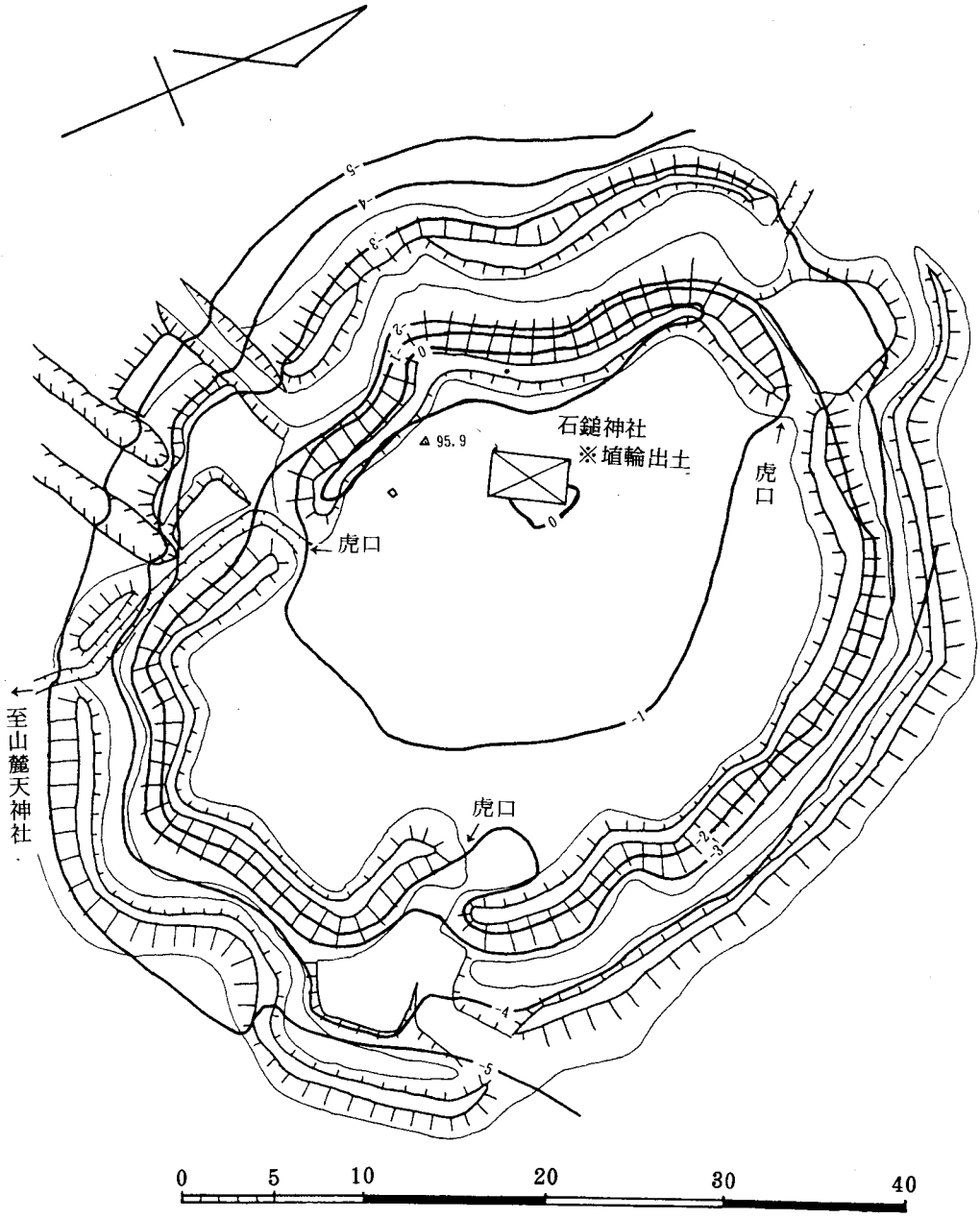
山頂主郭を取り囲む土塁は、上端幅約一メートル、高さ内側約〇・五メートル、外側約二メートルを計り、塁線は複雑に屈曲して、いわゆる「折」（横矢掛り）を形成しています。

「折」は、塁線に死角をなくすために考案された築城法で、近世に至って完成する極めて高度な技術です。この城の場合、「折」はほとんど全周にわたってみられ、屈曲部に立ってみますと、左右の塁線を横に見渡すことが出来、単純な縄張り（城の設計図）にいかに変化を持たせようとしたか、築城者の苦心を察することができます。

（空堀）　内側の土塁と、外側の土塁との間は、上端幅五～六メートル、深さ二メートルの空堀となっています。普通、備後地方の山城の場合、空堀は屋根筋に対して直交して築かれた、「堀り切り」が一般的ですが、この城では、主郭を取り囲む「横堀」となっています。「横堀」も近世城郭に多く見られる築城技術で、堀底を道として利用することにより防禦力の向上をはかったものです。

（桝形虎口）　この城の大きな特徴は、虎口（城門）に「桝形」の型式を取り入れていることです。「桝形」は、城の出入口に方形の小空間を作ることによって城門を二重（垂直に接した二辺に設けられることが多い）にし、防禦力の画期的な向上をはか

位置（1:50000 井原）



要害山城跡実測図（1:400）

ったもので、戦国末期に各地の城郭に取り入れられました。

近世平山城の城門は、ほとんどこの型式です。

この城の場合、虎口は、北、東、西の三ケ所に残っていますが、いづれも「桝形」の型式を取っています。特に東側のものは遺構の残りがよく、この時期の桝形門として典型的なものです。

この「横堀」と「桝形」の組み合せによって、当城は単郭の簡単な縄張りにもかかわらず、大きな防禦力を持った山城となっています。

城内に侵入しようとする敵は、まず外側の土塁を突破し、空堀を渡って内側の土塁に取りつくわけですが、内側の土塁は二メートルの高さがあり、「折（横矢掛り）」によって城内からの死角は、ほとんどなく、直接これを越えて城内に侵入することは容易でありません。また、虎口から城内に侵入することも大変困難だったと思われます。虎口は三ケ所共「桝形」が形成され、城内に入るには二重の城門を突破しなければなりません。

なお、現在、この城への登山道は、西南麓の天神社境内から設置されていますが、この道は、外側の土塁線を破戒しており、本来の登城道とは考えられません。城への登城道や、山麓部の構造、周辺の遺跡との関連などは、今後の研究課題です。

歴史的考察

要害山城跡は、西麓に天神社が鎮座することから、「天神山城」として江戸時代の文献に招介されています。④

城主は、宮若狭守、山名清左衛門⑤と伝え、一番委しい『西備名区』は、「宮若狭守は、芦品郡新市の亀寿山城主で、同城が落城した天文三年（一五三四）以降、この城に居城したのであろうか。しかし、宮若狭守の名は各地の山城主として名を残しているから、この城に居城したのではなく、この辺りも宮氏の領地として、その名を伝えたのであろう」と考察しています。

宮氏は、南北朝時代以来、この附近の最有力豪族で、この城が宮氏によって築かれたとする伝承は理由のあることです。

しかし、今日残る城の遺構を見ますと、「折」、「桝形」、「横堀」等、戦国中期以降の様想を色濃く残していて、宮氏が居城したと伝える年代（戦国時代前期）と若干ずれがあるようです。

記録の上で、この城の存在する神辺平野周辺が大きな戦乱のうずに巻込まれたのは、天文十六年（一五四七）から同十八年（一五四九）にかけての「神辺合戦」に際してです。

この戦いは、尼子方の山名理興の拠る神辺城を、大内、毛利の連合軍が三年間にわたって包囲攻撃したものです。『陰徳太平記』等によりますと、この戦いで攻城側の毛利軍が本陣を置いたのが、要害山城南麓の「秋丸」で、「秋丸」は「安芸衆の本陣」にちなむ地名だと、伝えています。

当城の主郭土塁上に立って南方を望みますと、神辺黄葉山城は指呼の間です。又、東西の虎口は、神辺側からは城兵の出入が見えないように工夫されています。

これらのことから、要害山城は、室町時代宮氏によって築かれたとしても、現在残る遺構は、この神辺合戦に際して、攻城軍の「向城」として使用された時のものではないでしょうか。

「向城」とは、攻城戦が長期にわたる場合、攻手の本陣として築かれたもので、戦国時代、合戦が大規模になると、各地の戦いで盛んに築かれるようになったものです。

まとめ

以上、今回の測量調査によって明らかになった要害山城跡の特徴について、簡単に招介してみました。

城の歴史的考察のところで述べましたように、この城がもし神辺合戦の過程で築かれた向城であるとしますと、次の諸点で大変貴重な山城跡であることがわかります。

一つには、築城（改築）者が大内氏、或は毛利氏として特定でき、当時の大内、或は毛利氏の築城技術を推定できることが挙げられます。また、築城時期が特定でき、当時の築城術の進歩を検当することも可能です。そして、さらに重要な点は、この城が「向城」として築城（改築）されたものとすると、合戦直後廃棄され、今日まで改変されていないと考えられることです。

山城というものは、初めて築かれてから廃城に至るまで、何代もの城主によって多くの手が加えられているものです。この点からすると築城者、年代が特定でき、その後手が加えられていない要害山城跡は、大変重要な山城遺跡であるといえます。開発によって多くの山城遺構が失なわれつつある今日、是非とも後世に残したい山城の一つです。

注①新人物往来社刊『日本城郭全集』『日本城郭大系』、神辺郷土史研究会『神辺城をめぐる武将たち』、備陽史探訪の会『山城志』第十集、『神辺町史』上巻等。
②『福山市史』上巻、但し、円筒埴輪は主郭西よりの社殿下より出土し、同書が言うような古墳の空堀を利用した山城とは考えられない。山頂部の高まりに円墳が存在したものであろう。
③一九九二年一月、㈱鈴木工務店社長鈴木康平氏より贈られたもの。
④『備後古城記』、『備陽六郡志』、『西備名区』、『芸備風土記』、『福山志料』等。
⑤寛文四年の奥書を有する『備後国福山御領分古城記』（福山城鐘櫓文書館蔵）には、「山名清左衛門、宮若狭守領地なり」とあり、この山名氏は宮氏の代官としてこの地に居城したものであろう。

大和路探訪 ―その二―

平田　恵彦

前回は三輪駅でミィーちゃんに別れを告げたところで終りでした。今回はその続きで、石上神宮編です。

石上神宮は、三輪から桜井線で約一五分。天理市布留にあります。

天理市は文字通り天理教一色の街で、法被を着た人々が、そこらじゅうをはつらつと走り回っています。商店街も信者相手の店が非常に多く、一種独特の雰囲気です。

本部の神殿は和風の壮大な建築物ですが、それほど違和感はありません。しかし、それに付随する現代建築の宿舎群は、大空を遮るほどの圧倒的な数量で、異次元に迷い込んだような印象を受けました。

石上神宮は、これらの建築群を通り抜けた小高い丘の上にあって、駅からは三〇分ほど歩きます。

この神社は、延喜式神名帳に「石上布留御魂神社」または「石上布都御魂神社」と記された古社で、大神神社同様、ヤマト王権とは密接な関係がありました。神剣フツノミタマ（いわゆる十握剣）を祭祀対象としているように、古代では軍神・武器神としての性格を色濃く持っていました。事実、この布留の地にヤマト王権の武器庫（重文の鉄盾二面が残っています）があったのです。

これを管理していたのが、崇仏論争で蘇我氏に破れた物部氏（連）です。敗北後、物部氏は散り散りとなって名を変え、各地に逃れました。

実は、岡山県赤磐郡吉井町にも石上布都魂神社があり、ここの宮司さんが代々物部氏なのです（物部姓は池田綱政公に許され、当代は物部忠三郎氏です）。

神剣フツノミタマは、当初、この吉井町の石上布都魂神社にあったことがわかっています。

『日本書紀』の一書に素盞嗚命の蛇退治に関して「其の蛇を断りし剣をば、号けて蛇之麁と曰ふ。此は今石上に在り」とあり、別の一書には、「蛇を断りたまへる剣は今吉備の神部の許に在り」とあります。さらに大正一五年発行の『石上神宮御由緒書』にも、「もと備前国赤坂にありしが、仁徳天皇の御代、霊夢の告によりて春日臣これを当神宮に遷し加え祭る」とあります。

石上神宮で最も著名なのは、神功皇后摂政五二年（三七二）に百済から贈られたと伝えられる七支刀（国宝）があることです。

これは刀身の左右に三本ずつの枝のある珍しい形で、金象眼の銘文があります。表面には、

「泰□四年□月十六日丙午正陽　造百練□七支刀　世辟百兵　宜供供候王□□□□作」とあり、裏面には、

「先世□来　未有此刀　百済□世□□生聖□　故為倭王□造　伝□□世」

とあります。

日韓関係史には欠かせぬ史料ですが、銘文の判読については諸説があって決着がついていません。

たとえば冒頭の年号「泰□」だけでも「泰和」「泰初」「泰始」と読む説があります。

この七支刀は原則として非公開ですが、この春、京都国立博物館の特別展「倭国　耶馬台国と大和王権」で一般に公開され、私も見ることができました。

石上神宮の丘上から市街地を見下ろすと、陽はすでに傾き、雲から薄日がもれていました。その光は巨大な建築群を照らし、あたかも宗教画のような空間を作り出していました。

参道には和鶏が遊んでいますが、すでに参拝客はあらかた帰ったらしく、森閑とした雰囲気です。

境内を横切るように山辺の道が通

っており、南へ十数キロ進むと大神神社へつながります。この出発点に大きな牛の像がありました。尾道の御袖八幡宮にもほぼ同じものを見かけましたが、どういう意味があるのでしょうか。奉納馬の代わりに馬の像を置く（布留遺跡からは、殺馬儀礼を示す馬の骨や歯が数多く発見されています）のならよくわかるのですが。どなたか教えて下さい。

本殿（流造、桧皮葺）は参道を突っ切ってぶつかったところの左手にあり、やや変わった配置です。

かつては、本殿がありませんでした。大神神社と同じく、本来あるべき姿だったのです。しかし、何を思ったのかわかりませんが、大正二年に建ててしまったのです。

本殿奥には有名な禁足地があり、以前はここを拝殿から拝んでいました。いまは剣先状の玉垣が囲んでいて、直接見ることはできません。

禁足地の発掘は、明治七年、大宮司であった菅政友の手によって初めて行われ、多数の勾玉、管玉の他、完全な形の剣一振りが発見されました。菅政友はこれが神剣フツノミタマに違いないとして、神庫に納めることを教部省に届け出ています。

この剣を模した神剣を作ることを明治天皇が月山貞一に命ぜられ、出来あがった剣は、天皇から福島靖堂の手を経て、昭和九年に吉井町の石上布都魂神社に寄贈されました。現在は岡山県立博物館にあるということです。

社殿向かいには、いかにも神錆びた感じの出雲建雄神社があります。摂社とはいえ式内社で、拝殿は国宝に指定されています。建築物としてはこちらのほうが好感が持てました。

暗くなるまであっという間でした。帰りに裏の小径を通ると、打ち捨てられた小社がありました。鳥居は傾き、祠の屋根は崩れかけ、雑草は伸び放題です。いまでもその光景が目に焼きついて離れません。

甲奴町の史跡巡り

岡本　貞子

四月四日の例会は甲奴町である。今迄地名は度々伺った事があったが、府中から奥へは訪れた事もなかった。敬愛この上ない熊谷さんの講師ときき、早くから参加申込みをした。

当日は昔、言い伝えられた「狐の嫁入り」と言う、降ったり又晴れたり、陽が射し乍ら雨がバラつく一日だったが、とても有意義だった。

上野山城址、苔生す竹藪の中の矢田氏の墓、須佐神社の八角長柄構えの大神輿、絵馬堂に掲げられた絵馬の数に、かなり古い年代のものは、絵具が脱落したものもあったが、冬は殊に寒冷地の山上に、特殊な保存法でなく、屋根と板壁のみの社屋でよくこれ丈の彩色が保存出来たものだと驚いた。

そこから室町時代の窯跡、その昔神に奉納する敬謙な精神が、営々と作業を続けさせたのであろうか。この窯跡の所有者は藤原家、探訪の説明をして下さる先生も藤原先生だった。

この一帯は太古から、中国山脈の尾根伝いに往来が盛んで、文化も高く中世ではとても繁栄した所と聞いている。

正願寺では、同寺のぼん鐘が第二時世界大戦中に供出され幾多の変転の末、アトランタのカーターセンターに保管されている。その縁でカーター元大統領が来町された事があった。これを機に地区の生徒の交流、ホームステイが始まり町の中心街は、カーター通りと命名されて町を挙げての行事になった由。

これは未来にかけてどんなにすばらしい事か。国際的にそしてこの地球の為に、お互いを理解する良い事だと思った。帰路のバスの中では、原稿なしの熊谷さんの探訪の熱弁に今更、その実力を讃歎した。

夕暮の迫る頃福山へ帰着、花見の開宴。この会場の確保や諸準備の為、二、三の役員の方は探訪に行かれなかった。申しわけありません。

万朶の桜を仰ぎつゝ、夜風は肌にうす寒かったが、べに提灯が闇にくっきり浮かび上がる頃には、激しく熱い青春の謡歌が始まった。

福山城のもと　春　高楼の花の宴。
花の精に出逢ったような
華やいだ夜でした。

中世を読む会のご案内

城郭研究部会

テーマ　小早川家文書を読む
時　毎月第三火曜日午後七時
（七月二〇日（火）午後七時）
（八月二四日（火）午後七時）
※八月は第四火曜日です。
場所　中央公民館（花園町）
会費　無料
テキスト代　七〇〇円
連絡先　五五－〇五三五（出内）

古ふんめぐりに参加して

大谷台小　猪原　一樹

五月五日に、ぼくは家族と古ふんめぐりに参加しました。前の日に古ふんがなんなのか、本で調べました。昔のえらい人のおはかだとゆうことが分かりました。いろんな形がありました。

バスで津之郷に行きました。

さいしょに本谷古ふんに行きました。草がたくさん生えた山の中に、石室がありました。

中は広くて石の間から草が出ていました。本谷古ふんは、円ふんだとゆうことです。丸い形がうすくのこっていました。

こんな山の上に車もなんにもない時代にどうやってこんな大きな石を運んだんだろうかと思いました。こんなに大きな石を運んで、自分のはかを作らせるなんてよほどえらい人なんだなう思いました。

一番大きな古ふんはすべり石古ふんでした。

すごくきゅうな坂を上りました。横穴式石室でした。中は今までで一番広くて、かたそでもありました。石室で三つおぼえておきなさいといわれました。一つは「かたそで」もう一つは「げんしつ」もう一つは「せんどう」をおぼえました。

さいごはイコーカ山古ふんに行きました。

中は見れなかったのでざんねんです。

帰りは電車にのって帰りました。

古ふんを見ながら大昔の人たちの生活をいろいろ想ぞうしました。

今みたいにいろいろな道具がない時に、人々があつまりちえをだしあいながらあんな大きな古ふんを作ったなんてものすごいことだと思う。こうして人間はしんぽしてきたんだろうなと思った。

すごく勉強になった一日でした。

卯月紀行

岡本　貞子

会報の予告で知った小笹丸という風雅な城名に、心弾んでバスに乗る。当日は目まぐるしく移り変る空模様である。

十時過ぎ到着した現地の頂上は、それほど高台ではなく、桜の時期にはさぞ美しいであろう桜樹から、幽かに葉ざくらの香が漂ってくる。武者隠し、大手門の道すじ、城砦、井戸、土塁跡等、小じんまりした平山城型である。

城主であった竹井氏は、九州の出自であって戦の度に宇佐八幡を先頭に立て、加護を祈り、勝利を収めたという。

今は昔、この戦乱の時代こゝに住んだ人々は、どの様に考え、どの様に生きていたのであろうか。内戦の続いた古代から幾世紀、人民はどんなにか平和を祈った事であろう。今この地に立って、深い感慨に浸った。

承久の乱の後、中部地方から移封され星田に居を構えた三村氏。数々の戦いのあと四散して、その名が残るばかりの今、福山の川口に、福山開国の主水野勝成公が、旧恩に報いて手厚く召抱えた三村氏の一派が現存されている由、暖く美しいロマンも伺うことが出来た。

中世夢が原では、古い様式を新らしい工法で古風に則って造られた家、広々とした丘陵地に点在する数々のイベントの華麗さ、と、突然現われた中世武士に案内され地下ホールへ、「それでは皆さん」と武者氏が備え付けのキャタツを登ってボタンを押された瞬間。

暗の中から現われる古代の映像と、大きな音響、爛々と光る眼で隆起を始めた大蛇。

現世と古代が交錯する一瞬であった。

後藤　匡史

○美星町は、星の降る様な、きれいな町だと想って来たが、雨が降って来た。

こりゃ考えが、雨勝った（甘かった）

○諸国流浪中の、水野勝成は、このあたりを、往来していて、一時期三村氏の食客となった。

○若い頃の、水野勝成は、暴れん坊だった。だって、向う水野（見ずの）勝成と云うじゃないか。

○水野勝成は、戦に強かった。

そりゃそうだ

此の戦、勝成。

○夏草や

雨露光る

城の跡

○梅雨時や

ユーツな心

露如らず

○美星町

僕のお声も

美星調

美星町の探訪
（小笹丸城跡）

小島　袈裟春

作家の遠藤周作先生が、岡山県小田郡美星町と深い関係を持って居る事を、今回の探訪で始めて教えて頂いた。

遠藤周作こと狐狸庵先生の作家としての資質の豊かさは、一方ではユーモア文学やぐうたら文学に、読む人々の心を捕えて放さず、又一方では小説の「沈黙」で、神の救いを信じ神の教えに従がう者の報われぬ殉教の行動を描き、宗教の何んたるかを問う、先生がみずから、信仰する宗教の問題を抉り出すと云う、柔軟ながら厳しい態度も又超一級のところに存在すると私しは思う。

その狐狸庵先生の実の母は竹井姓で、現在美星町黒忠地区に城跡を残す「小笹丸城」を根拠地として、戦国動乱の世に押流された小豪族「竹井党」の一族の後裔との事である。

狐狸庵先生は近著「反逆」の中で織田、豊臣の時代の激動を描き、母方の先祖の一部を準主役として、実に愛情深く登場させ、暗々重苦しいこの主題を和らげる、一服の清涼剤の如き働きをさせて居るが、その事も又今回教えて頂いた事なのである。

さてその小笹丸城跡は黒忠地区の城平にあって、北に流れる城平川の右岸と百数十米の急斜面を持つ、独立の峰を利用したものではあるが、城の防衛線として役立つのは、この面のみであって、残りの北、東、南面にどの程度の防衛力があるのか、は少々疑問がある。本丸はこの独立峰の頂上を削平し、南北二十米余、東西三十米余の長円形で北から東に土塁が残って居る、その上に登って周囲を見渡すと、西方一帯の見通しは誠に良いが、北から東に約百程離れて本丸よりやゝ低い小峰が連なって居てその峰の防衛設備は不明だが逆にそこを攻取られたら城の運命は終りとも思えるからである。

本丸から二十米位下って幅五～十五米位の帯曲輪がぐるりと本丸を取囲み、井戸や立堀、武者隠し等も備えて、一応中世後期の城としての機能は持って居るが、如何にも規模が小さく、まるで遊園地の作りものの如くであった、（事実伺町の名所「中世夢ケ原」ではこの城跡の更に半分程で再現させてある）。

たゞし良く観察すると一段下って北西方向に乾郭とも呼ぶべき二段の小尾根が張り出して上段は墓地に下段は大きな農家の屋敷になって居るが、そこは仲々の要害である、北の小峰との間は水田があるが、それは立派な堀であるし、東の山腹に大小の郭や薬研堀の跡もあって、万一の際には非戦斗員も含め二百人近い籠城も可能であったと思われる、（見学参加者を三倍して見た）水は水田や井戸もある上東堀跡には近代の井戸もある位で、充分だったと私しは思う（但し実戦があったかどうか私しは知らない）。

南の中腹は緩い斜面で広さもあり、トノヤブ、トノヤシキの地名が残って居て、数戸の農家があるが城主の館跡なのであろうか、その脇を城に登る道の下に古びた石碑を見付けて一人で降りて眺めたら、正面に竹野井常陸守氏高公、平等院殿威覚永長大居士尊位、右横に文録四？未年、左横に当村庄屋として数名の名が刻まれて居た、右横の？字が乙字の様で、年表に照合すると文録四年乙未（一五九五年）に当る、碑そのものは江戸期庄屋制度確立後のものと思うが、文録四年は氏高公の没年を示すと私しは考える。（元禄と読むと羊・未で字体が異なる）。

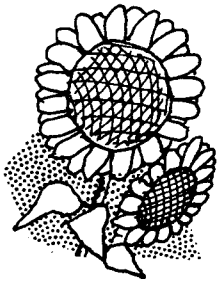
又眼下の城平橋の近くには、氏高神社が祀られて居て、この氏高と云う人物は後世の村民に人気が高い様である、それは何故か……、実はそれを探るのが探訪の醍醐味でもあるので、私しは何時か又訪ねて見度いと思う。

城跡の南西方向の本村と云われる辺りに、大永年間（一五二一年頃）竹井光高公が、九州宇佐から勧請したと伝える社があって、宇佐八幡の名称を残し、竹井一族の出身地を暗示して居る様でもある。光高公は氏高公の父なのであろうか、又は祖父なのであろうか、興味の一つでもある。

又小笹丸城は慶長一九年（一六一四年）に廃城になったと伝えるがこの年十月大阪冬の陣があり、翌、元和元年の五月夏の陣で豊臣氏が滅亡し、徳川政権による一国一城令が発せられるのである、廃城時の当主は春高公と伝えられるが、私しは春高公は大阪方に参戦した、と考える、寄親であった毛利氏は慶長五年（一六〇〇年）防長に去ってしまった。支えを失った春高公が起死回生の願いを、大阪城の豊臣方に賭けたとしても不思議ではない、隣りの備後国でも同じ立場の馬屋原氏が大阪方に参戦して居る、私しには春高公の気持が痛い程分かるのである、そして

春高公は討死したのであろうとも…。そうだ……私しは小笹丸城跡で素晴しいものを見付けた、それは笹百合の花である。山陰に誰にも知られず数本、笹そっくりな茎と葉っぱ、その頂点に淡いピンク色の清楚な花を数輪、うつむき加減に咲かせて居た、その姿に誘われてそっと顔を近づけて見るとやゝ強い匂いがしたが、それは期待とは裏腹に良い香りと云うには程遠く、妙に汗臭く男っぽい匂いであった。見掛けによらぬその香り、恰好良く殊勝に見えても、我が身の実利や保身のためには、主君も友人も平然と裏切る、戦国期の中小土豪達の象徴の様な花なのであった。しかし私しは始めて対面したこの花が好きになってしまった、生きる方便を身に付けた花、そう思って辺りを注意すると、あちらこちらに点々と見えて来た、だが私しは誰にも教えなかった、あの城跡の笹百合の花は私しだけのものにして置き度い。

一九九三年六月



屏風と寝た夜

佐藤　秀子

三次は、ぼんやりと考え事をするには、とてもいい街です。

比熊山城へ登った時も鳳源寺へ行った時も帰りに寄った尾関山公園でも誰にも会いませんでした。山城の山頂で、くずれた屋根瓦に埋もれた石仏を見つけました。時折しか訪ずれない人を待つ仏の表情は、なんだかさみしそうで、あたりにあった野草を供えて、話しかけました。

どうぞお入り下さいと書かれた民俗資料館は、古い洋館で、中には来館者用のノートがおいてあり、入館者はわたしだけです。中国の小数民族の衣装展をやっていましたが、あわせて生活習慣も説明されており、既婚の従兄と結婚して子供を生んでから年下の男性と再度結婚する…民族の繁栄・存続を考えたこの徹底した制度は、日本では考えられないことで、中国の広大さをしみじみと感じました。昼間だというのに人通りもなく、物音の聞こえない館内は目をとじると、どこかへ連れていってくれそうで、年を経た建物の暖かい心が、やさしく包みこんどくれました。

街には古い看板があちこちに残っており、頼山陽の叔父（父の弟）否坪が三次奉行のとき居住した茅葺の家屋もあります。文化十年（一八一三）三次、恵蘇（庄原）の郡代官となり、後に三上、奴可（比婆）郡代官を併せて勤め、「芸備孝義伝」「芸藩通志」を編纂したと書かれてあり、広島藩の南北貧富の格差を解消する策をすすめ、論語の「均無負」を訓えとし「上ヲ損シ下ヲ益ス是ヲ益ト云フ」との経世済民策をとり善政をしたそうです。昔人の精進と勉強量には、ただ驚嘆の声ばかりで、顔をあげることができません。

今日、三次へ来たのは、尾形光琳の屏風といっしょに寝るためです。

子供の頃、祖母が枕元において寝ていた屏風を亡くなった後にもらって、二階の物置で叔父の勲章や中国の絵はがきといっしょに並べて遊んだ思い出、近所の旧家でみせてもらった秀吉の扇子と焦村の弟子の屏風、出かけた先の寺に、置いてあった水墨画の屏風、屏風で囲まれた空間は、そこだけ違う香りの異次元で、画家の心が漂っています。

大洲の寺で見た屏風は、県北の禅寺の四〜五倍はある大きい本堂の中。ゆっくりと年を経てすわっていました。「この屏風は創建時からあると伝わっております」八十才をすぎた住職の説明でした。百二十年以上生きてきたものは、もう生命を得て、ゆるぎない大きさで私の内に、入ってきました。

田中美術館へ矢田貝さんと岩下さんの三人で出かけたのは八重桜の季節でした。「院展を再興した画家達」という展示で、ここで見た木村武山の屏風に三人共、恋をしてしまいました。「小春」と名づけられた屏風は、小春日和の秋の日を描いたもので柿の木と実、葉鶏頭、稗、笹竹…と、右半分の木を中心に絶妙に配された草木や雑穀は三十八才という壮年期に描かれたものだけに、気の遠くなる様な制作時間、六曲一双に盛りこまれた例えようもない精進の果は、見る人全ての感情を奪い去ってしまいます。一葉、一個、一草として同じもののない精密な描写は画家の凝縮された昇華の結晶で、言葉では、言いあらわせない世界を体感できた時を、そして与えてくれた画家に心を残しながら、酔いしれた三人は、帰り際、再度屏風の前でため息をついて館を出ました。

倉庫の中は空調がされていて画に

適切な室温に保たれています。少し酔っていなければ夢は見れまいと私は会の人達を見習って時々は飲むようになったお酒を（幻の酒だという呉春の冷やです）注いでもらって、十時過ぎに屏風の前にすわりました。尾形光琳の六曲二双、ぐるりとまわりを囲ってもらって、私だけの陣地です。太政奉還の時、山口藩の協力を感謝して徳川慶喜より寄贈されたものを藩主の子孫より手に入れたそうで四季の花が金箔を張った下側に青の絵の具で描いてあります。清々しく凛とした屏風です。他にも秀吉が信長の侍大将の頃（天正三～四年）描いた大和がなで「ひょうたんから駒」と書いてある絵つきの軸、狩野探幽の象、赤獅子、龍に観音様が乗っている三幅の軸、ずーっと時代が下って梅原龍三郎の大きい絵、あまりに画家達の想いがつまりすぎて息苦しい気もします。死後、自分の残したものを訪ねてあちこち放浪している魂が、美術館とか蔵で出会う時、どんな語らいをするのでしょうか。秀吉と梅原龍三郎は気が合いそうな気がします。不思議な夜は更けていきました。

古墳探訪日記

中島　政子

つばくらめ瀬戸の島山濃かりけり
紅透ける独活を購ふ公民館
参道の杉の大樹に藤の花
山川の激つしぶきや藤の花
虎杖を食みつ古墳を巡りけり
古墳出て花見の客となりにけり
菜の花に沈み幼なの糸電話
山茱萸の花に明るき古墳径
花筏谷間の町の川に沿ひ
裏側の句碑読み下ろし犬ふぐり
真向に日の落ちて行く辛夷かな
桃咲いて吉備地は丸き山ばかり
カナ文字の発祥地とや残る花
其処此処に竹の子生えて古墳みち
木洩日のわずかな遺跡蝮草（まむしくさ）
榛名富士肩に夕映え五月来る
河原石積み塩原の鮎焼けり
那須岳の大玻璃通す御来迎
正座して合掌するや御来迎
突堤の蝙蝠（こうもり）染まる夕茜
放牧の牛鳴き交す花菖蒲
清流に沿ひて巡れり菖蒲園
朽舟に乾ききったる蟇（ひきがえる）
すっぽんの睡蓮を這ふ禅の池
睡蓮に鯉のつぶやく水輪かな
睡蓮や鯉の背鰭の飛沫をり
名荷（みょうが）の子雨音隠す薮畳
袈裟のごと阿闍利の墓に蛇の衣
中世の土塁に立ちし夏薊
明易し鷺の鋭声裏川に

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

古墳探訪
―備南の古代文化を歩く―

（内容）
福山市から神辺町、新市町にかけての古墳、遺跡を八コースに別けて解説。地図、図版、写真多数。A5版。一〇七ページ
カラーカバー付
頒価一五〇〇円、啓文社各店で販売中。

備陽史探訪の会刊

予告　平成五年度一泊旅行
芸北吉川氏紀行

（期日）十月十・十一日（連休）
（会費）未定
（内容）芸北の戦国大名として有名な吉川氏の遺跡（日山城、小倉山城、駿河丸城、吉川元春居館等）や小保利の薬師堂、龍山八幡社（吉川元春再建）等の文化財を訪ねる。

詳細は後日案内致します。

備陽史探訪の会主催シンポジウム

阿部正弘を語る

内容　福山が生んだ数少ない日本史的人物、開明の政治家・青年宰相・阿部伊勢守正弘。
黒船来航を機に、激動の一途をたどる江戸末期の政治情勢。日本の将来を見据えながら安政の改革を断行。志半ばにして三九歳の若さで逝った男。優柔不断なのか、真の英傑なのか、二つに大きく分かれる評価。徹底討論で、その真実の姿をいま明らかにする。

日時　八月一日（日）午後一時三〇分

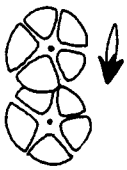
場所　福山市民会館第一会議室

○参加自由です。

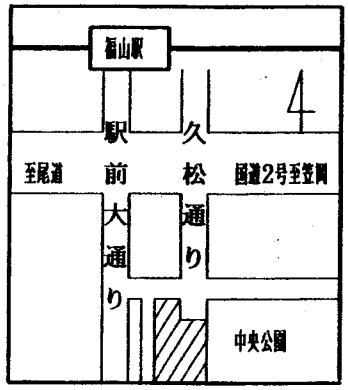
○費用は原則的に無料です。（資料代百円程度集めることもあります）

○終了後、恒例の懇親会（ビアガーデン）を催しますので、多数ご参加下さい。

○問い合せは事務局まで〈（〇八四九）五三ー六一五七〉



駅から市民会館までの略図
福山駅から徒歩一〇分
駐車場完備



事務局日誌

四月十七日　第二回郷土史講座（中央公民館）「油木の山城と土豪」出内博都（三三名出席）

同月十八日　事務局会議（中央公民館）

同月二二日　役員会（於ホーセン）

五月五日　第十一回親と子の古墳めぐり（赤坂コース）　九〇名参加

同月二二日　第三回郷土史講座（於中央公民館）「古墳の編年」網本善光（参加二八名）

同月三〇日　事務局会議（於中央公民館）

六月十二日　事務局会議（於中央公民館）

同月十三日　六月例会（バス）「美星町の史跡めぐりー中世夢ケ原と戦国大名三村氏発生の地を訪ねてー」講師田口会長（参加五六名）

六月二〇日　『親と子の古墳めぐり』一〇周年記念『古墳探訪』出版祝賀会（於備後遺族会館）　四八名出席

同月二七日　第四回郷土史講座（於市民会館）「備南の弥生遺跡」七森義人（二三名出席）

七月十日　第五回郷土史講座（中央公民館）「幻しの備後国大神神社を推理する」平田恵彦（二三名）

事務局より

☆待望の『古墳探訪』、一刻も早く皆さんにお届けしたいのですが…（経費の都合で、郵送は遠方のかたのみに限らせていただきます）

市内の会員の皆さんには何等かの方法でお渡しする予定です。

出来れば、会の行事に参加して本を受け取って下さい（近所に会員さんがおられる場合は、まとめて受け取っていただければ有難いのですが……。

※市内でしたら、会長、副会長、事務局長にご連絡下さい。会長以下が、お届けに上ります。

☆会に対する、ご意見、ご要望がありましたら、遠慮なくお寄せ下さい。

☆次号会報は九月末発刊予定です。九月十日までに原稿をお寄せ下さい。内容は会と歴史に関するものなら何でもけっこうです。ただし四百字詰原稿用紙六枚以内です。

備陽史探訪の会
事務局
〒720 福山市多治米町五ー一九ー八
TEL（〇八四九）五三ー六一五七